

幻嗅出現後、頻回に迷子になった高齢者側頭葉てんかんの一例

渡辺病院 稲山 靖弘

【はじめに】高齢者の徘徊、異臭などは、認知症の BPSD と捉えられ、診断が困難な場合がある。今回われわれは、異臭、意識消失、徘徊をみとめ、MRI にて側頭葉てんかんと診断しえた一例を経験したので報告する【症例】70才台、男性【初診時主訴】松脂の臭いがした後、迷子になる【既往歴】高脂血症【家族歴】特記すべきことなし【生活歴】中学卒業後、林業、通信関係に従事、70歳退職。【現状歴】x-1年秋、散歩中、松脂のくさったような臭いを感じた。まわりに、それらしき風景はなく、気がつくと、違う場所にいた。そのようなことを数回認めたため、x年6月、耳鼻科と脳外科を受診したが異常なしといわれた。しかしながら、月2回と増加してきたため、当院受診した。【初診時所見】意識は清明、神経学的に異常を認めなかった。本人から、「約一年ほど前に、散歩中、松脂の臭いがしてきた。周囲を見ても、臭いのもとはなく、気がつくと、もといた場所と200～300mくらい移動していた。転倒はしていない。最近では、月に2回と増加している。」という訴えがあった。【検査所見】HDS-R：27点、立体模写：完成、SDS：23、血液生化学検査：異常なし、心電図：異常なし、頭部MRI：FLAIR像にて、右海馬に硬化像を認めた、頭部MRA：特に異常なし、脳SPECT：明らかな左右差なし。【治療経過】臨床所見、画像所見から、側頭葉てんかんと考え、カルバマゼピン100mg投与した。翌週受診したとき、松脂の臭いはあるが、迷子がなくなったため、200mgとした。一ヶ月後、松脂の臭いは、なくなり、迷子も消失していた。ふらつき、皮疹もなく、経過していた。CBZ血中濃度、4.7 μ g/mL。受診1年経過も、特に問題なく経過している。【考察】高齢者の徘徊、異臭などは、認知症の BPSD と捉えられ、診断が困難であることがあるが、今回われわれは、MRIのFLAIR像にて海馬硬化をみとめ、容易に側頭葉てんかんと診断でき、適切な画像診断の有用性を再認識した。